

## (特別) 観劇会 (新橋演舞場)

## 新国劇100年(劇団若獅子 結成30周年記念公演)

9月26、27日両日に亘る(特別)観劇会は、アイアン・クラブとしては、初めての企画となる新橋演舞場での新国劇でした。新国劇と聞いて、ある世代以上の方々は島田正吾や辰巳柳太郎を懐かしく思い出す事でしょう。



辰巳柳太郎

島田正吾

今回、新国劇100年・劇団若獅子30周年記念公演と言う事でご案内した結果、20名のご参加を頂きました。

ほぼ満員の観客は久しぶりの恋人に会う様な気持ちの高ぶりを感じる“老老男女”。幕前、劇団若獅子の看板女優、南條瑞江さんが新国劇100年の歴史をひも解いてくれました。



南條 瑞江

新国劇は百年前の大正6(1917)年に澤田正二郎が弱冠24歳で創設した劇団です。劇団名には、新しい国演劇をめざす若い演劇青年達の志が込められています。以来70年の歴史を刻み、昭和62(1987)年、解散しました。同年に直ぐ、劇団員の有志が朝丘雪路らの支援を得て、「劇団若獅子」を結成し、新国劇の作品「王将」「白野弁十郎」「大菩薩峠」などを上演して今年で30周年をむかえました。



澤田正二郎

今回の記念公演の二作品は、いずれも澤田正二郎が大正8(1919)年に関西で初演して一世を風靡し、「赤城の山も今夜を限り」「春雨じゃ、濡れて行こう」の名セリフとともに、長く日本人に親しまれた演目です。澤田は、きびきびとした演技と迫真の殺陣が受けて喝采を浴び、その絶大な人気を足掛かりに、当時の新進作家の菊池寛、山本有三らの作品を次々舞台に乗せて、命名に込められた志を貫徹しました。旗揚げから12年、その絶頂期に中耳炎をこじらせて昭和4(1929)年、わずか

36歳で亡くなります。澤田を師と仰ぐ島田、辰巳の両雄がその後を引き継ぎ、緒形拳を始め盟友を輩出しまし



笠原 章

た。最後の舞台が今回記念公演を行う新橋演舞場でした。

今回の公演では夫々主役を劇団

代表の笠原章がつとめます。

お待たせしました。開幕です。**最初の出し物は「国定忠治」**、大飢饉の苦しみに喘いでいる農民救済のために、代官屋敷へ切り込み米蔵を襲った上州国定村の任侠国定忠治が立てこもる赤城天神山、そこに上州きっての御用聞き、川田屋惣次がお上の命で召し捕りに山を登ってくる所から始まる。互いに役目と義理の板挟みに苦しむやり取りの末、いきり立つ子分たちを押しとどめ、忠治は山を降りる決断をする。「赤城の山も今宵を限り、生まれ故郷の国定の村や縄張りを捨て、国を捨て、可愛い子分の手前達とも別れ別れになる首途だ。」

堂々たる体躯、きりっとした面構え、張りのある明瞭なセリフ、重厚な演技に背筋が伸び、思わず義理と人情の世界に引き込まれます。「加賀の住人小松五郎義兼が鍛えし業物、万年溜の雪水に洗い清め、俺には生涯手前と言う強い味方があったのだ。」で柄杓を後に投げ、名刀小松五郎義兼に、口に含んだ水を霧吹きする名場面に思わず掛け声を飲み込む、「笠原、日本一！」。



伊吹 吾郎

山を降りた後に立ち廻りをする悪役、山形屋藤造を演じる友情出演の伊吹吾郎の軽妙な演技、話術を楽しみました。

二作目は「月形半平太」、舞台はガラッと変わり華やかな京の色里、料亭うれし野。時は幕末。勤皇の志士、長州藩士月形半平太は、薩摩と長州の連衡を画策する坂本竜馬と密会を重ね、日夜苦悩していた。春雨煙る黄昏時、芸妓梅松と舞妓歌菊を連れて、月形が現れる。

「月様、雨が」「春雨じゃ、濡れて行こう。」名セリフに、笠原さんは惚れ惚れするほど恰好が良いです、最高です！。相手役の芸妓染八に歌舞伎界から市川猿之助が駆けつけてくれました。旦那の仇討に父である一文字国重の短刀を忍ばせて襲うが、やがて恋心に抱き、月形に身を焦がす梅松と恋を争うようになる。名妓の貫録、心の移ろい、立ち振る舞い、セリフの重み——「いよ、高麗屋！」。三條河原で新鮮組を相手にたった一人斬り結ぶ月形を、橋桁の陰からじっと見つめていたのは——。



大きな区切りの記念公演にかけた出演者全員の意気込みと作品に込めた愛情に圧倒され、感動しました。近くの席で熱心に観劇している若者を見付け、声を掛けてみました所、年齢22歳、演劇役者志望との事。嬉しい

ですね、新国劇がこれからも粘り強くファンの期待に応えてくれるよう祈っています。

(山田 清實・記)